

が最も高いとされている。最近本邦でも NICU が各地に開設され、当院でも昭和53年4月以来、新生児を対象に NICU が設けられた。

そこで大部分が心肺窮迫を呈現症状とする NICU 患者の中の CHD 児の実態について調査してみた。

われわれは、当院の NICU に入院した、昭和53年4月から昭和55年12月までの入院総数382名のうち34名(8.9%)に CHD を認めた。CHD を有する症例の在胎週数は、29週3月から42週5日であった。また、出生体重は1,377g から4,025g の間にあつた。その性別は男子21名(72.4%)女子8名(27.6%)と男子に多く認められた。

呈現症状としては、チアノーゼが最も多く44.1%であつた。次いで、多呼吸(32.4%)心雑音(29.4%)哺乳力不良(8.8%)、呼吸困難(2.9%)黄疸(2.9%)であつた。

診断は、VSD が26.5%と最も多く、TOF, TGA, PDA, DORV (うち1例は18Trisomy), TAPVR, PPA, CoA, Truncus, Single RV, Williams syndrome, 複合心奇型(うち1例は18Trisomy)および Primary PFC, Asplenia, Congenital contractile arachnoidactry, Interruption であつた。軽症 VSD は含んでいない。

治療は、TAPVR の1例、VSD+PDA+PH の1例、Interruption の1例、CoA の1例と合計4例に手術を施行し、Interruption が1年経過している他は、3例とも術後に死亡している。

転帰は、生存22名(64.7%)、死亡12名(35.3%)であつた。死亡原因としては、心不全6例、術後に3例、肺炎、髄膜炎、DIC 合併が各1例、無呼吸が1例であつた。生存22名は、術後の1例も含めて経過観察中である。

4. 受容体自己抗体による疾患の検出法についての検討

(内科2)

○磯崎 収・対馬 敏夫・鎮目 和夫

(目的) 内分泌学の領域においては受容体に対する自己抗体によつて惹起される疾患が注目されている。その代表的なものが甲状腺疾患である Graves 病およびインスリン受容体抗体による糖尿病である。このような疾患を検出する手段としてはラジオリセプターアッセイ(RRA)の技術が極めて有用である。今回われわれは上記の二疾患について RRA を用いる方法と他の方法による検出法について検討した。

(方法) 甲状腺 TSH 受容体標品としてはヒトおよびブタ甲状腺の粗膜分画を用いた。インスリン受容体としてはヒト胎盤、モルモット腎の粗膜分画およびラット脂肪細胞を用いた。受容体の可溶化には TritonX-100 を用いた。¹²⁵I-インスリンと受容体を covalent に結合させるためには新しく開発された Cross linker である disuccinimidyl suberate を用いた。非特異的な抗体の検出法としては IgG に結合する性質を持つ Protein-A を使用した。ホルモンおよび protein A の標識にはクロロミンT法を使用した。

(結果) インスリン受容体抗体およびバセドウ病の TSH 受容体抗体は従来報告のごとく、各々の受容体に結合することによつて標識ホルモンの受容体への結合を抑制した。しかしこの方法では受容体のホルモン結合部位以外の部分には向けられた抗体の検出は不可能である。そこで ¹²⁵I-インスリンを受容体と反応させたのち crosslinker で両者を結合し、さらにこの複合体を可溶化した。この complex を患者血清と反応させて complex に抗体を結合し、これに抗ヒト IgG あるいはプロテインA—セファロースを加えて沈降させ、この放射能を測定することによつて抗体の検出を試みた。この方法により微量の抗体も検出できることが判明した。特異性には乏しいが細胞膜分画に対する抗体の検出法として protein-A も有用であつた。

(結語) 受容体抗体の検出法には通常の RRA の他に、immunoprecipitationや protein A も有効な手段である。

5. 灌流保存を応用した自家腎移植の1症例 —A case of ectopic pelvic kidney—

(腎臓病総合医療センター外科、泌尿器科)

○高橋 公太・東間 紘・近森 正昭・
淵之上昌平・須藤 尚美・合谷 信行・
山縣 淳・光野 貫一・前田 節夫・
大貫 忠男・早坂勇太郎・阿岸 鉄三・
太田 和夫・吉田美喜子・梅津 隆子

はじめに

自家腎移植であらかじめ手術に困難が予想される場合、より安全で確実な腎保存法が望まれる。特に温阻血時間(WIT)の長い症例では持続低温灌流保存法が単純冷却保存法より適切と考えられる。今回、ectopic pelvic kidney の1症例に灌流保存を適用し自家腎移植術を行なつたので報告する。

症例は27歳女性で腎盂腎炎、腹痛、自然流産を繰り返

す。過去2回腹部手術を受け2回目の手術時に偶然右腎が骨盤腎であることを発見され本科に紹介された。入院時の現症では腹部を圧迫すると Roving's sign 陽性であるが、他に特記すべきことない。腎機能も正常であった。レントゲン所見で左腎は正常であり、右骨盤腎は第5腰椎より骨盤にかけてあり、腎動脈は腹部大動脈、内腸骨動脈より2本出ている。保存的療法に限界があり、自家腎移植術が適応と考え手術を行なった。手術所見は過去2回腹部手術のため癒着がひどく腎臓を剝離するのに困難を極め、腎血管の spasm も強く、WIT も約40分を経過した。腎を摘出後、albumin solution を用い Gambio-PF 3B 腎保存装置で灌流保存を75分間行ない、全阻血時間3時間後に右腸骨窩に腎臓を移植した。術後、移植腎は急性尿細壊死による急性腎不全におちいつたが、術後4週目に機能を回復し、患者は術後37日目に退院し、経過良好である。

考察

従来、自家腎移植術では保存時間が短かいので腎の保存法として単純保存が適切と考えられていたが、最近ではこの術式の適応の拡大につれてかなり高度の手術手技が要求されるようになってきている。すなわち WIT の長い例や腎血管の spasm の強い例では腎実質の障害がある程度進行していることが推定され、このような症例に対しては腎機能の温存という立場から灌流保存が単純保存より適切と考えられている。そこで本症例にこれを適成し満足すべき成績を得たので報告した。

6. ヒステリーの1例

(神経精神科) 吉増 克實・〇平沢 伸一

来院時32歳の女性。元来自発性エゴイズムとしての名誉成情に聡くまた強靱な意志力をもつ自負心の強い意志人的性格。22歳時、創業期の某会社に入社した直後、妻帯している社長に 肉体関係を強要され、数年間内縁関係。その間に二児をもうける。しかし先妻の自殺後の遺族の非難、内縁関係故の家族からの蔑視、相手の社長の別の女性との再婚などで社会的にも行き詰ってしまう。このような状況の中で27歳の3月頃から憑依症状(幻聴、所作が自分のものでない、何か自分が中に入ってくる)離人症状などを訴えるようになった。それと同時に家族に対する怨みの爆発、自殺企図が見られたが、前者には内容の健忘があり、後者には狂言色彩が認められた。

入院後の態度には症状に対する逆説的無関心が認められたが、数週間ですべて消滅、代つて相

手に対する根深い復讐心と怨根の自覚、自己卑下の表示が医師に対しておこなわれた。

この症例は、深く傷ついた自意識が、しばしば見られる如き自殺への直接動因とならず、屈折した形での自己主張として、反応性エゴイズム(復讐心、怨根)の形をとつたものである。しかし当初はこの自己主張までも強い各欲のために阻まれ、自己欺瞞的態度を生み、更にはヒステリー症状(本例では憑依症状、離人症状としてまとめられた)を形成した。このように自我の存在主張の視点から見ることによつて、反応性エゴイズム、自己欺瞞的態度、ヒステリー症状が相互に関連した一連の症状として理解されることを1例によつて示した。

7. 血漿カテコラミン濃度の動態(第2報)

一正常血圧者における運動負荷前後の血漿カテコラミン濃度について—

(成人医学センター)

〇谷口 晶子・堀江 俊伸・根津真知子・
雨宮 邦子・赤松 順子・山口いづみ・
山田 辰一・渋谷 実

近年、動脈硬化症の発生、進展にとくに重要な影響を与えるものとしていくつかの risk factor があげられているが、カテコラミンが vasoactive substance として血中に放出される以上、これらが risk factor にいろいろな影響を与えることが考えられる。むしろ動脈硬化を発生、進展せしめる risk factor の mechanism の鍵としてカテコラミンが主役を占めていると考えられる場合すらある。われわれは正常血圧者における安静時血漿ノルアドレナリン濃度において、60歳台は20歳台と比較し、有意に高値を示したことを報告したが、今回、正常血圧者において Master two-step test による運動負荷をおこない、その前後における血漿カテコラミンの変動を検討し、若年者に比し高齢者において血漿ノルアドレナリン濃度の増加率が大きかったので報告した。

質問 (第一衛生) 坂本佳寿美

- 1) 心拍数から運動強度が軽度なので一考を要す。(何を目的としているのか判明しない)
- 2) 被検者のバックグラウンドを調査すべきである。正常血圧者だけでは不十分と思われる。

応答 (成人医学センター) 谷口 晶子

- 1) われわれは各年齢層に適した運動量としてマスター2段階試験の運動量をえらび、それに対する血中カテコラミン濃度の反応様式を調べました。
- 2) 血圧に関しては正常である群を対象として、マス